

高橋虫麻呂の龍田の歌

はじめに

萬葉集卷九には、高橋虫麻呂による龍田越えの歌が三組ある。一七四七―八と一七四九―五〇の二組は「春三月、諸卿大夫等の、難波に下る時の歌二首 并せて短歌」として一つの題詞のもとに収められる。もう一組の一七五一―二は「難波に経宿りて明日に還り来る時の歌一首 并せて短歌」と、到着の翌日に大和へ帰還する際の歌として直後に収められている。

卷九の虫麻呂歌集の歌は、原歌集からまとまって抜き取られ採録されているとみられる。雑歌・相聞・挽歌に割り振られる前、いかなる構成であったかは確言しがたいが、各部の配列が、虫麻呂歌集にあったものを保存している蓋然性は高いとみられよう。そして以下に見てゆくように、

この三組には互いを意識していると思われる表現が散見する。すなわち、虫麻呂歌集には他に例を見ない連作として注目されるのである。

その連作の間で巧みに時間が操作されている点は、虫麻呂の長歌——特に所謂「伝説歌」——の方法と相通ずるものとして考究に値しよう。またそれを通じて表現される「桜」をめぐる情は、虫麻呂の独自性を描き出すのではないだろうか。

一

春三月、諸卿大夫等の、難波に下る時の歌二首 并せて短歌（9・一七四七―五〇）

A 1 白雲の 龍田の山の 滝の上の 小桜の嶺に 咲
きををる 桜の花は 山高み 風し止まねば 春

瀧 口 翠

雨の 継ぎてし降れば 上枝は 散り過ぎにけり
下枝に 残れる花は しましくは 散りなまがひ
そ 草枕 客去君之 帰り来るまで

反歌

A 2

吾去者 七日は過ぎじ 龍田彦 ゆめこの花を
風にな散らし

B 1

白雲の 龍田の山を 夕暮に うち越え行けば
滝の上の 桜の花は 咲きたるは 散り過ぎにけり
含めるは 咲き継ぎぬべし ちちごちの花
の盛りに 見さずとも かにもかくにも 君之三
行者 今にしあるべし

反歌

B 2

暇あらば なづさひ渡り 向つ峰の 桜の花も
折らましものを

難波に経宿りて明日に還り来る時の歌一首
并せて短歌(同・一七五一—二)

C 1

鳥山を い行き巡れる 川沿ひの 岡辺の道ゆ
昨日こそ 我が越え来しか 一夜のみ 寝たりし
からに 峰の上の 桜の花は 滝の瀬ゆ 散らひ
て流る 君が見む その日までには 山おろしの
風な吹きそと うち越えて 名に負へる社に 風
祭らせな

反歌

C 2

い行き逢ひの 坂の麓に 咲きををる 桜の花を
見せむ児もがも

諸卿大夫らが難波に下るために龍田を越える往路のA、B、
到着の翌日に帰還する時に、再び龍田を越えるCである。

いずれの長歌・反歌にも桜花が歌われている。萬葉集中
で「龍田」は「旅」「越ゆ」とともに歌われることが多く、
季節の景物では「もみち」が三例見られるのみで、龍田の
桜を歌うものは、他に当該歌群の影響下にあるとみられる、
家持の「龍田山 見つつ越え来し 桜花 散りか過ぎなむ
我が帰るとに」(20・四三九五)があるに過ぎない。「龍
田」の「桜」を詠むのは当該歌群の一つの特徴ということ
ができよう。しかも、その花は「散り過ぎ」ていたり(A
1)、いまだ「含め」ていたり(B1)と、盛りの花では
ない。旅を言祝ぐ歌であるのに、満足すべき花を歌わない
ことが注意される。

一組ずつみてゆこう。A1は、龍田の地名から歌い起し、
そこに咲きほこる桜を一旦は描き出す。しかし続けて歌わ
れるのは、「風し止まねば」「春雨の 継ぎてし降れば」と、
風雨によって上枝の桜が散り過ぎてしまっていることであ
る。そして、「せめて下枝に残る花は、君の帰りまで散ら
ないよう」と願い、一首は閉じられる。

「止まねば」「降れば」という対句的な風雨の描写には「上枝」・「下枝」という相對應する語が続くが、直接に風雨の描写を受けるのは「上枝は 散りすぎにけり」のみで、「上枝」と對になる「下枝」については、「下枝に 残れる花は しましくは 散りなまがひそ」と文を改めて願望へと話題を展開させてゆく。そこには、散り過ぎた花から咲き残る花へ、過去から未来へという時の流れも描かれていると言えよう。連對に似せられた、花の時間の順を追った進行が、未来への願望につながってゆき、眼前の状況描写から願ひへと、なめらかに展開してゆくのである。

A1末尾は「旅行く君が帰り来るまで」と、「君」の帰りまで桜の散らないことを願う。いつまでも散らずにいて欲しい、というのではなく、「君」の帰還を彩って欲しいということである。風雨によって上枝の桜はすでに散ってしまっており、わずかに下枝に残る桜を見て、君の帰還まで桜の花の残ることを願う。それは上官の旅の慰めに、桜の花を添えたい心の表現である。眼前の龍田の桜は、盛りとは言えない状態だが、それをそのままに歌いつつ、場に即し、桜に託して、下官としての上官への敬慕を歌っているのである。

反歌A2は、〈旅は七日を超えない短いものであるから、花を散らしてくれるな〉と龍田彦に願う。この一首もまた、

自分の帰路という未来の花の姿を願ひ、現在と未来を歌い込むものである。

この長反歌について、内部に矛盾を含むとする見方がある。A1末尾では、「下枝に 残れる花は しましくは 散りなまがひそ 草枕 客去君之 帰り来るまで」と、「君」の帰還まで花の散らなむことを願っているのに、同じことをA2では、「吾去者 七日は過ぎじ 龍田彦 ゆめこの花を 風にな散らし」と、「我」の旅によせて願っている点である。

『代匠記』初稿本は、長歌について、

これはとゞまれる人のよみたるやうにきこゆれど、反歌に、わがゆきはなぬかは過じといへるをおもふに、われも難波へ下る身ながら、大夫のしりへにしたがへる人の、貴人のために、草枕たびゆく君が歸りくるまでといひ、みづからもゆくゆへに、我ゆきはなぬかは過じともいへるなり。相違せず

と述べる。「きこゆれど」「相違せず」という物言いには、契沖が引っかけかりを感じていることが読み取れる。しかし結論としては、大夫等に従って下る歌い手が、貴人のために願ひ、かつ、自分もゆくから反歌はこのように歌うのであって、矛盾はしないというのである。ただし、精撰本では長歌について「終ノ三句ハ、此哥ハ京ニ留マル人ノヨメ

ル故ナリ」とし、反歌について「發句ハ今按、吾ト君ト相似タル故ニ君ニテ、キミカユキハナルヲ誤テ吾ニ作レルナルヘシ。」と述べている。「吾」は「君」の誤字であり、A2は本来「君が行は七日は過ぎじ」という形であろうと、見解を変えているのである。

『略解』は逆に、長歌の「客去君之」の方に誤字がある
とみて、

「君」といへるは同じく旅行く人をさせるか、されど
穩ならず、「君」は「吾」の誤にて、「たびゆくわれが
かへりくまでに」なるべし

とする。

近代では、『総釈』（川田順氏担当）が

この長歌と反歌とは作者の人格が違ふのではあるまい
か。反歌は旅行く人、長歌はその妻が詠んだものと解
することができる。若しさうであるならば、極めて珍
らしい行き方で大いに注意してよい點である

と、長歌と反歌で人格が変わるのではないかと指摘してい
る。

『全集』も、「長歌はここから引き返す見送りの者が詠ん
だ形であるが、この語（引用者注・「我が行」）は、反歌が
旅行く者の作であることを示す。贈答歌に似せたものか」
としており、『新全集』もほぼ同様にみている。最近でも、

小田芳寿氏¹⁾がこの立場をとる。

しかし、A1の表現は、見送る立場からの歌いぶりであ
ると言えるだろうか。一首は、小桜の嶺の桜が風雨によつ
て散り過ぎていることを歌うが、その「上枝は散り過ぎに
けり」「下枝に残れる花はしましくは散りなまがひそ」と
は、実際に桜を前にしての謂いであろう。この歌が、『総
釈』や『全集』の述べるように、見送る者の立場に模して
詠んだ歌であるなら、見送る者が龍田まで来ていることに
なる。しかし、境の地龍田の山中まで見送ることはあり得
るだろうか。更に、これらの説によれば、長歌と反歌とが
贈答の関係にあることになる。集中でそのような関係に
なっているものを検討してみよう。

菅の根の ねもころごろに 我が思へる 妹によりて
は 言之禁毛^{ことのみみ} なくありこそと 斎瓮を 斎ひ掘り据
ゑ 竹玉を 問なく貫き垂れ 天地の 神をそ我が祈
む いたもすべなみ

反歌

たらちねの 母尔毛不謂^{ははにもらさず} 褰有之^{つつめりし} 心はよしゑ 君が
まにまに

(13・三二八―五)

「妹」への思いを歌う長歌に、「君」の心のままになるこ
とを歌う反歌が付されている。長歌が「言之禁」のないこ
とを願うのに対し、反歌は「母尔毛不謂 褰有之」心を、

君の心のままにすると応えている。「言こと之の禁いみ」を媒介として、男女が互いに対する思いを述べ合う構成である。こうした例と比較した時、A1A2は贈答の形になっていっていると言いはしい。A2に見送る者への配慮はなく、「旅行く君」に対して「我が行」となっているだけで、他に答歌らしい点は見当たらない。贈答や唱和に似せたものとみることは無理がある。

一方、『全釈』や『全註釈』は、長歌では下僚たる自分を表面には現さず、反歌では自分も含めての一行の意で「吾が行」と述べているとみている。しかしそのようにとるには、「旅行く君」「吾が行」という二語は、対照的に過ぎる感が否めない。

Aが単独の作品であるならば、長歌と反歌で主体が替わっていると捉えることもできるかも知れない。しかし、やはり往路の歌Aは、B、さらに復路の歌Cと併せて読むべきものであろう。C題詞の「明日あくるひ」や、C1において「昨日こそ我が越え来しか」「一夜のみ寝たりしからに」と、往路を振り返りつつ歌うことは、ABとCとの関係が密接であることを示していよう。

そしてCの復路の旅は、後にみるように「君」を難波に残し、一足先に帰還するものである。そうした、この難波往還における、「君」と「我」とが完全に同行し一体化す

るのではなく、対照されるような関係が、この「旅行く君」「我が行」という語にも表れているのではないだろうか。往路の歌ですでに、復路で君と行動を別にするのが意識されている、その表れとして、「我が行」があると思われるのである。一見矛盾して見える言葉の関係は、復路の歌との連作関係を認めることによって、解消されるのではないだろうか。

二

往路一組目の長反歌A1A2は、既に散り始めている桜が帰路まで残ることを願うことに終始している。二組目はどうかであろうか。

B1は「夕暮れにうち越え行けば」と龍田越えの時間を示し、「滝の上の桜」を歌う。これはA1で「滝の上の小桜の嶺に咲きをを」っていた桜であらう。A1の「上枝」の桜が、B1の「咲きたる」桜と対応すると見られる。A1においてそれと対置されていたのは、「下枝に残れる花」であった。「しましは散りなまがひそ」と言っているのが、既に開花しているものと思われるが、B1では、「含める」蕾が対置される。A1とは異なり、今咲いている花は歌わないのである。しかし、盛りでないところの「含める」桜を、これから「咲き継」ぐという期待感をもって取

り上げ、それにより、「こちごちの花の盛り」には見えな
い今を、「君」の出発にふさわしい時と定位する。A1A
2が桜の盛りでないことを惜しんでいたのに対して、B1
では、盛りでなくとも「君がみ行きは今にしあるべし」と、
出発にふさわしい時であるのだと歌っている点は、対照的
といえよう。現実を理想化せずに、現状に即して歌う姿勢
は一組目と同様であるが、その現実をもとに、上官の幸多
き旅を願ひ、励ますのである。

この「君がみ行き」については、天皇の行幸を指すとす
る見方がある。集中にみえる当該歌以外のミユキ三例が、
いずれも天皇の行幸に限られることから、この旅は天平四
年三月十日に始まる聖武天皇の難波行幸の「下検分乃至準
備の為の旅行」(『全註釈』)であるとみるのである。

しかし行幸の「下検分乃至準備の為の旅行」であったと
しても、題詞「春三月諸卿大夫等下難波時歌」のもとに天
皇の行幸について歌うのは不自然であろう。さらに当該歌
は「夕暮れにうち越え行けば」と時間を限定し、「今にし
あるべし」と歌う。ミユキは、「夕暮れ」の「今」、ともに
龍田を越える「君」についての言葉なのである。「今」で
はない、未来の行幸について歌うとみるのは無理があると
思われる。

それは、表記からも窺われよう。当該歌以外の、集中の

ミユキの例は次の通りである。

梓弓 爪弾く夜音の 遠音にも 君之御幸乎きみのみゆきを 聞かく
し良しも (4・五三一 海上女王)

天皇之 行幸乃隨意みゆきのまにま もののふの 八十伴の緒と 出
でて行きし うるはし夫は： (4・五四三 笠金村)

天皇之 行幸之隨みゆきのまにま 我妹子が 手枕まかず 月そ経
にける (6・一〇三二 大伴家持)

右の三例のミユキは、いずれも聖武天皇の行幸を指してい
る。気付かれるのは、三例ともに「幸」字が用いられてい
ることである。一方、虫麻呂当該歌は「君之三行」と記し
ており、「幸」の字ではない。この文字遣いは、身近な貴
人の旅を表すべく選ばれたもののではないだろうか。天
皇の行幸ではないため「幸」の字を避け、近しい貴人の旅
をミユキと表したと考えるべきだと思われる。

反歌B2は、向つ峰の桜を求める。長歌で、花の咲き具
合に不満の残る状況をそのままに歌いつつも、蕾によって
祝ったのだから、反歌ではそのことを重ねて言祝ぐ方がよ
さそうに思われる。しかし、ここでは再び、その場の桜が
満足ゆく状態ではないことを歌う。咲き誇る桜を「君」に
見せたい気持ちは、咲き継ぐ蕾を愛でてなお、あるのだら
う。夕暮れに旅路を急ぐ一行には、向つ峰に渡る暇などな
く、桜を手折ることは叶わぬ願いであろう。しかしこのよ

うに歌うことで、上官たちと共に桜を愛でながら龍田を越えたかったという思いを、再度強調する。上官を思う歌い手の姿を描いていると言えよう。

このようにA Bは、貴紳の旅を予祝する歌であるはずなのに、現在を満足すべき時とせず、不足や危惧、願望を歌っている。

中西進氏は、春雨の落花を歌う発想の基づくところを、龍田神の鎮花祭に求める。そうした信仰や「伝統性」・「生活性」によって、桜にコノハナサクヤビメにみられるような「短命の表象」、「凋落のけはい」を「肉体的に」感じ取ったことが、この歌群の基盤にあるとする。それは「風雅の中に春雨の桜を気遣うというのではないらしい」という。

これに対し西地貴子氏は、A 2の「我が行」を根拠とし、「諸卿大夫等」貴人たちの難波下りであったにもかかわらず、それを『我が行き』と表現し得る一行であるという意識が虫麻呂にあったとみるべきではないか」と述べ、「身分や官位の高下を越えた風流韻事の交わり」がこの歌の基底にあるという。

難波という比較的近い場所への数日の旅のために、桜という一貫したテーマを持つ、往路復路併せて三組もの長反歌を詠んでいることから、この旅で龍田の桜を愛でるこ

とに一定の重さを感じられる。そしてA 1で歌われた、桜花を散らした風や春雨は、花だけでなく、龍田を越える一行をも包んだであろう。さらにB 1には「白雲の 龍田の山を 夕晩^{ゆふばん}尔^に うち越え行けば」と、この龍田越えが「夕晩」時であることが歌われている。思わしくない天候の中、夜の訪れの前に山を越える急ぎの旅であることは、B 2に「暇^{いとま}有者^{あつち} なづさひ渡り 向つ峰の 桜の花も 折らましもの」と、「暇」のなさを歎いていることにも明らかである。そのように先を急ぐ旅における、せめてもの慰めがちょうど時節である桜の花だったのではないか。B 2には「昼見れど 飽かぬ田子の浦 大君の 命恐み 夜見つるかも」(3・二九七田口益人)に通じるような、公用の旅程により佳景を存分に楽しめないことを惜しむ心が窺われる。風雅を楽しむものではないという中西進氏の意見には賛同できない。

しかし西地氏のいう「身分や官位の高下を越えた風流韻事の交わり」が歌われているともまた、言えないであろう。歌い手の思いの中心にあるのが上官であることは、「旅去く君が帰る来るまで」(A 1)「君がみゆきは今にしあるべし」(B 1)という言葉に明らかである。歌い手は立場の差をわきまえた上で上官を思いやっている。そこには一定の距離が保たれており、一体化しているとは言いがたい。

なお疑問が残るのは、なぜ理想化せず、そのままの桜を歌ったのかということである。風流を楽しむのであれば、梅花宴のように散り落ちる花の美しさを愛でても良いのではないか。「君」に美しく降りかかる花びらを詠みもてなすのではない、散り過ぎる花への嘆きを歌う心は、風流韻事では説明しきれないのではないだろうか。

ここで参照したいのが、萬葉集中に散見される、誰かと共に愛でたかった花の散ってしまったことを歌う歌々である。

我がやどの 一群萩を 思ふ児に 見せずほとほと
散らしつるかも (8・一五六五 大伴家持)

うぐひすの 来鳴く山吹 うたがたも 君が手触れず
花散らめやも (17・三九六八 大伴池主)

…百枝さし 生ふる橘 玉に貫く 五月を近み あえ
ぬがに 花咲きにけり 朝に日に 出で見るごとに
息の緒に 我が思ふ妹に まそ鏡 清き月夜に ただ
一目 見するまでには 散りこすな ゆめと言ひつつ
… (8・一五〇七 大伴家持)

一五六五番歌と三九七八番歌は、思う人に見せたかった花が散ってしまったことを歌うものである。美しく咲いた花をみて、共に愛でたいと願っていたのに、会えぬままに花は散ってしまった。せつかくの花の時期に会うことがで

きなかった、つまりそれだけの期間会えずにいることの落胆の表現である。一五〇七番歌の「ただ一目 見するまでには 散りこすな ゆめ」は、花の散らないことへの願いであると同時に、早く妹に会いたいという願いでもある。

次の歌は、その開花期間に寄せて、相手の訪れを促す。

我がやどの 萩花咲けり 見に來ませ いま二日だみ
あらば散りなむ (8・一六二一 巫部麻蘇娘子)

花は時期のあるものゆえに、同じ時間を共有する願いを託されている。そこには、季節を大切な人と共に楽しもうとする心が認められる。

このような例の中にあつて、A1の「旅行く君が帰り来るまで」や、四節にみるCが、自分のいない場での花の美を願っていることには注目すべきではないだろうか。そうした歌は類をみない。

「君」と共にいる今、花は盛りとは言えないが、まだ残つてはいる。それはこの旅路の慰めである。帰路、「君」と「我」とは離ればなれであるが、それぞれに再びこの龍田を越える時まで、桜に散らずにいてほしい。上官と離れ一足先に帰る自分を慰めてほしいと願い(A2)、さらに遅れて上官が帰還する時まで咲き残り、旅路を彩つてほしいと願う(A1、C1)。そこには、下官として、上官を敬慕する姿が歌われているように思われる。

このような「君」を思う「我」の姿は、虫麻呂のほかの作品にもみられるものである。

検使大伴卿の、筑波山に登る時の歌一首 并せて短歌
(9・一七五三―四)

衣手 常陸の国の 二並ぶ 筑波の山を 見まく欲り
君来ませりと 暑けくに 汗かきなけ 木の根取り
うそぶき登り 峰の上を 君に見すれば 男神も 許
したまひ 女神も ちはひたまひて 時となく 雲居
雨降る 筑波嶺を さやに照らして いふかりし 国
のまほらを つばらかに 示したまへば 嬉しみと
紐の緒解きて 家のごと 解けてそ遊ぶ うちなびく
春見ましゆは 夏草の 繁きはあれど 今日の樂しさ

(反歌略)

筑波嶺を見ようといらつしやつた「君」を「筑波の山を見まく欲り 君来ませりと」と際立たせた上で、「暑けくに 汗かきなけ 木の根取り うそぶき登り」と、登山の様子を描く。そして「峰の上を 君に見すれば」というように、「君」のために行動する「我」の姿を描く。「君」を中心とした一行の中で、「君」と「我」は、敢えて一体化することなく、客人と案内者という距離を保っているとい

えるだろう。

鹿島郡の刈野橋にして、大伴卿を別るる歌一首
并せて短歌 (同・一七八〇―一)

牡牛の 三宅の潟に さし向かふ 鹿島の崎に さ丹
塗りの 小舟を設け 玉巻きの 小楫しじ貫き 夕潮
の 満ちのとどみに み舟子を 率ひ立てて 呼び立
てて み舟出でなば 浜も狭に 後れ並み居て 臥い
まろび 恋ひかも居らむ 足ざりし 音のみや泣かむ
海上の その津をさして 君が漕ぎ行かば

反歌

海つ路の 和ぎなむ時も 渡らなむ かく立つ波に
舟出すべしや

「君」の出発の時を想像し、「み舟子を 率ひ立てて 呼び立てて み舟出でなば」自分たちは「浜も狭に 後れ並み居て 臥ひまろび 恋ひかも居らむ 足ざりし 音のみや泣かむ」と、悲嘆にくれるであろうことを歌う。別れゆく「君」と、残される「我」たちを対照させるものである。そして反歌では、君の出立を先に延ばそうと訴えかけており、別れを惜しむ自分たちの姿を描いていると言える。旅立ちの歌にも関わらず、旅の無事を予祝するのではなく、「君」のあとに残される「我」らの別れの悲しさを訴える一首である。

このように「君」と「我」とを対置し、「我」の「君」への思いを歌うのが、これらの歌に共通する特色である。そのようにして、下官の上官に対する敬慕を表現しているのではないだろうか。「君」を尊重する「我」の姿を歌うことで、「君」への敬愛を表現しているのである。虫麻呂の龍田の歌々にもまた、こうした「君」と「我」とが対峙するような関係が認められよう。

往路の長反歌二組に共通するのは、「君」の旅を桜の花で彩りたいという「我」の願である。できれば「こちごちの花の盛り」の時に龍田を越えてほしかったのだが、すでに散り始めてしまっている。せめて残っている桜だけでも、「君」の帰りまで散らないでほしい、と願うのがA1A2、桜の盛りではないが出発にふさわしい時だとしながらも、向つ峰の桜を求め叶わぬ願いを歌うのが、B1B2である。「君」のために桜を惜しむ心と、旅立ちを言祝ぐという、二つの思いが、長反歌を二組重ねることによって表されているといえよう。

四

続いて復路の歌Cをみよう。Cは、題詞によると難波に一泊し、翌日帰路につく際の歌である。さきにも述べたように、歌からは上官より一足早い帰還であったことが窺わ

れる。

C1は冒頭から「昨日こそ我が越え来しか」「一夜のみ寝たりしからに」と、前日の道を振り返る。しかしたった一晚のうちに、「桜の花は 滝の瀬ゆ 散らひて流」れてしまった。そうした状況を目にし、君の帰還まで桜の残るように、風祭しようと歌い一首は閉じられる。

C1が、対句も倒置も用いず直叙を続けるのは、散り急ぐ桜をみてすぐさま、更に後に帰路につく「君」のことを思う歌い手の、常に君を思う心の表現であると思われる。往路のA1B1は、共に対句を用い、「君」と共に見る景物を意味づけながら歌われていた。それに対する当該歌の直叙は、君なき道をひたすらに帰る足取りを表すかのようである。

昨日来た道を振り返る時、当然、共に残る桜を愛でた「君」が想起されるであろう。しかし今は「君」と離れてしまっており、桜はさらに散り急いでしまっている。往路との対照により盛りを過ぎゆく桜を印象づけ、「君」の不在という、満たされない思いを際立たせていると思われる。

こうした時間の布置は、やはり虫麻呂歌の特徴をよく示すように思われる。当該歌群には、往路と復路の二日間が歌われている。そしてそれは、「君」とともにある旅と、「君」を残しての旅とであった。それぞれの歌は、桜の現

状を歌い、歌の今その瞬間を捉えている。B1では、「夕暮にうち越え行けば」と、龍田越の時間を限定し歌いこむ。C1では、「昨日こそ我が越え来しか」「一夜のみ寝たりしからに」と、往路との時間差を歌う。往路と復路それぞれの時間を、明確に歌っているのである。

長歌の多くが時間の設定をもたない中で、当該歌群が時間を限定しながら歌っているのは特徴的である。それは、その時々を捉えることで、「君」とともにある旅と「君」不在の旅とを対照的に浮かび上がらせる為ではないだろうか。そうしてみるとやはり、当該歌群は、往路と復路とを歌うことを前提として詠まれた作であると思われるのである。往路では復路を想定し歌い、復路では往路を振り返り歌う。それにより「君」の不在に関わらず、常に「君」を思う下官の姿が強調されているよう。

さらに、それぞれの歌が、過去・現在・未来を自在に詠み込んでいることも注意される。A1A2では、散り過ぎた花と残る花によって、過去から未来にわたる時間を歌い、B1では同様に散り過ぎた桜を詠じつつ、それとまだ蕾の花を対照させ、咲き継いでゆく未来を歌う。更にC1では、往路という過去を振り返り、「君」の帰還を歌う。A Bに歌われた過去から、自分の帰還する現在、君が帰還する未来という三つの時間を歌うのである。眼前の桜から過

去を思い、未来を思う。桜を媒介として時間を行き来しながら、「君」を常に思う「我」の姿を歌う。龍田という場所の往還が、過ぎ去り、振り返られる時間の往還をも表すように感じられる。

反歌C2は、場を坂のふもとに移し、咲きををる桜を共に楽しむ女性を求める一首である。この反歌については、しばしば、長歌から大きく方向を転じるものであると説かれていた。『全釈』『私注』は構成に変化を与えるためのものと見、『釈注』は長歌が公的な、上官との関わりにおいての願いを、反歌が私的な、娘子への憧れからの願いを歌うものとして捉える。また、金井清一氏は『全注』の当該歌【考】において、桜の花が散り果ててしまえば「君」は往路の美景を思い出さずに龍田を越え、「虫麻呂の昨日の晴れがましさ」も忘れ去られてしまうであろうとし、「なんとか『君』のためにも自分のためにも残んの桜の美があつて欲しい、というのが作者の心境であつたらう。反歌は、その『自分のため』の気持ち表面に出て、昨日の自分の栄光よりも現在の自分の願望が作者の心を占めたものである」と述べ、やはり長歌とは異なる、個人的詠嘆、私的願望を歌ったとみるのである。⁶⁾

しかしそれほどにC2は、C1と乖離するものであろうか。C1は確かめたように、「君」より一足先に帰路につ

き、再び龍田を訪れた歌い手が、往路で共に桜を愛でた「君」を思い、花のこれ以上散らぬことを願うものであった。C2は、坂のふもとで見事に咲きををる桜を見、ともに花を愛でる相手が欲しいと願うものである。「見せむ子もがも」は「我がやどのなでしこの花盛りなり手折りて一目見せむ児もがも」(8・一四九六家持)「青柳の糸の細しさ春風に乱れぬい間に見せむ児もがも」(10・一八五二)のように、時期の短い美しいものを共に愛でる相手を求めるものである。二節で述べたように、花は大切な人と共に時を過ごす願いを託されることが多い中で、C1は自分のいない場でも「君」が花を楽しむことを願う。そして今、龍田を越えた歌い手は坂のふもとに咲きををる桜を認めた

が、君と今共に愛でることは到底かなわない。そうした、せつかくの桜を「君」と共に愛で語らうことのできない物足りなさが、代わる存在を求める、人恋しさに昇華され、歌われているのではないだろうか。それは同じ虫麻呂の登筑波山歌(9・一七五七―八)の長反歌のあり方とも通じていよう。

五

以上見てきたように、巻九の高橋虫麻呂の龍田の歌は、往路・復路の歌共に、桜の散るのを惜しみ、盛りの桜を求

めているが、そこには「君」に桜の花を見せたいと願う「我」が歌われていた。「君」の幸いを願い、「君」のために一喜一憂する「我」の姿は、虫麻呂の、他の貴人をもてなす歌にも見られるものであった。

虫麻呂の歌に希求・願望表現の多いことは、はやく森本治吉氏が虫麻呂歌の結句を分析するなかで指摘し、井村哲夫氏、金井清一氏らの論もある。井村氏はそこに、「若い虫麻呂像」を見、金井氏は「疎外者虫麻呂」を見る、というように、歌人像を探るひとつの手がかりとされてきた。冒頭に掲げた当該歌群の傍線部は、指摘されている願望表現である。虫麻呂歌の中でも特に多いと言えよう。そして、この歌群に願望表現の多い事と、桜の盛りでないことを、不足を不足のままに歌うこととは、表裏の関係であると思われる。

金井清一氏は、虫麻呂の願望のほとんどが実現しがたいものであることを指摘する。そしてそれは、「対社会的な自己認識を持ち、社会的な人間関係における調和を求める虫麻呂が、この認識と願望との間にギャップを認めたとき、彼は対立を欲せぬあまり自らの欲望の充足におぼつかなさを感じ欲望を断念」するためであるという。社会からの疎外を感じている虫麻呂の性質が、このような叶わぬ願いを、軽く歌わせるのだというのである。

しかし当該歌群をみる時、虫麻呂の歌う願望の多くが実現しがたいのは、それらが、例えば「万世にもが」というような、満たされた現状の永続を願うものではなく、現状に満たされない思い、そこにない何かを追い求める心の表現であるからではないかと思われる。

当該歌群は、現状の不足、咲きををる桜への願いを歌うことで、「君」にもっとふさわしい、理想的な旅を願う下官の心を歌う。「君」にとつての最良の状況を希求するがゆえの願い、それが、当該歌群にみられる願望表現の内実ではないだろうか。「君」の旅立ちの時を満開の桜で彩りたいという思いとはうらはらに、まばらに咲く桜を、歌い手は理想化することなく、現実 に即して歌う。風雨に散る桜を惜しみ、一晩で散り進んだ桜への不安を歌うことは、旅の予祝とはかけ離れているかもしれない。しかし、そのことがかえって、「我」の「君」に楽しんで欲しい、「君」にとつて幸いであつてほしい」という、下官としての思いを盛る器として機能しているのである。

現状が理想的でないことを敢えてそのままに歌うことで、「君」のために理想を願う心を表現している。上官と下官という、近い距離での上下関係が、このような歌のあり方を要請するのだと思われる。それは、人麻呂や赤人・金村といった所謂「宮廷歌人」とは異なる扈従のあり方と言え

よう。

注

- (1) 「諸卿大夫等の難波に下る時の歌」の構成」上代文学会平成二三年度七月例会
- (2) 『全釈』はA1を「作者も諸卿大夫と同行してゐるのであるが、下僚たる自分を表面に現はさずに、諸卿大夫を主として詠んでゐる」、A2を「これは自分をも一行中の一人として詠んでゐる」とそれぞれ評す。『全註釈』は「長歌では、旅行ク君ガと云つたが、反歌では、自分を含めて一行の意に、ワガ行キと云つてゐる」と述べる。
- (3) 『全釈』、窪田『評釈』、『全註釈』、坂本信幸氏「花之盛尔雖不見左右―万葉集卷九・一七四九番の訓詁」(『ことばとことのは』平五・一二)等。
- (4) 「凋落の花」(「旅に棲む―高橋虫麻呂論」『中西進著作集』二七 平二二 初出昭五八・二)
- (5) 「高橋虫麻呂―桜花三部作への試み」(『武庫川国文』五七 平一三・三)
- (6) また、西地貴子氏注(5)論文は、往路の歌一七四七歌から復路の歌の長歌一七五一歌までは、「君」を含む貴人らの難波往還を桜花によって美しく飾ろうと願う虫麻呂の姿があるものの、この一七五二番歌では「そうした貴人への配慮をあたかもわすれたかのように『子』の存在を願望する。(中略)『咲きををる桜の花』

を見出だした途端に、虫麻呂は『思ふどち』を忘れさつてしまうのである。」と述べ、やはり長歌との乖離を指摘している。

(7) 虫麻呂がどのような立場で「諸卿大夫」に従ったのかは明確にはできない。ただし虫麻呂の難波での仕事が一泊で終わったのは、たとえば高官たちが必要とする物品の運搬などを想定することで説明できよう。

(8) 「表現の形態(2) 修辞」のうち「E 結句」(『高橋虫麻呂』昭一七)

(9) 「若い虫麻呂像」(『憶良と虫麻呂』昭四八 初出昭四一・七七)

(10) 「疎外者の文学」(『万葉詩史の論』昭五九 初出昭四八・一一二)

(11) 注(10) 書

本稿は平成二四年度上代文学会大会(於 東海大学)での発表に基づく。その際ご教示下さった方々に感謝申し上げる。

『上代文学』 投稿規程

1 投稿者は会員に限る。

2 投稿論文は原則として縦書きとし、分量は四百字詰め原稿用紙四十枚以内(注をも含む)とする。

3 ワープロ原稿の場合はソフト名を明記の上、設定は原則として縦書き、一行四十字とし、分量は四百行以内(注・図表を含む)とする。なお、本文と注のフォントサイズは十・五ポイント以上とし、行間は十六ポイント以上とする。

4 投稿論文は、原本を手許におき、コピー五部を送る。投稿論文の表紙には、投稿者の住所および勤務先(学生の場合は大学名、学部学科名または大学院課程名、学年)を記載する。氏名にはその読みをかなで書き加える。

5 投稿論文の送り先は事務局とする。

6 投稿論文の締切は、六月十五日、十一月三十日の年二度とする。

7 投稿論文に対しては、部分的修正を要求する場合があります。

8 投稿論文の採否は、編集委員会の議を経て常任理事会で決定し、その結果を通知する。

9 投稿論文(コピー五部)は返却しない。

10 「上代文学」に掲載された論文等の著作権は執筆者に帰属する。ただし、発行から五年を経過した分については、特に申し出がない限り、上代文学会の責任において順次電子化公開する。

11 翻刻・影印などを含む論文等については、「上代文学」への投稿に際し予め所蔵者から電子化公開の許可を得ておくこと。許可が得られない場合も投稿を妨げないが、その旨を原稿の末尾に明記するとともに、非公開とする箇所を明示すること。

12